

佐伯史談

第八十六号

昭和四十八年一月廿七日

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字稻垣字麓護寺羽柴方

「郷土史研究」誌
通算第百八号

研究

その後

山田土佐入道

会員 佐 脇 貫

佐伯の歴史を語るとき、中世史とくに佐伯氏時代について、文献、史料の類が少なく、大友興廢記などの軍記・伝承が、歴史研究の手がかりとして頗る大きなウエイトを占めている。この大友興廢記は佐伯惟定の家臣で、その亡命に従って藤堂氏のもとにあり、伊勢の津に余生を送ったという杉谷宗重の著作といわれ、大友氏の盛衰を辿りながら、佐伯氏にからまる伝承、説話を細大漏らさず記述している。

さて佐伯人にとつて、佐伯氏時代のクライマックスであり、今に伝えて誇りとするものは、豊薩戦における佐伯太郎惟定の武勇であるが、大友興廢記も豊薩軍記も堅固合戦には最前をさいて惟定の武勇を述べている。孤城柵竿礼を守って日薩数千の大軍に屈しなかつた少年大將

軍師山田土佐入道匡徳の采配よろしきを得て、侵入の敵軍は堅田采野に殲滅された。時以天正十四年十一月上旬、世は移り人は変つても、柵竿礼山を仰ぐたびに、佐伯人の誇りが胸に蘇えるのである。

「ここに日州伊東三位入道の家臣山田土佐入道匡徳といふ軍法者、今佐伯太郎の家でありて、……」と書き出

された山田土佐入道匡徳とは何者ぞ？ 私がかつて本誌第二十六号に「山田土佐入道匡徳」という一文を寄せ、この伝記不詳の人物の解明をこころ及ぶが、

当時は日向方面の史料が手に入らず、匡徳の人物像を描くことができなかつた。

山田匡徳については大友興廢記の別章に「弥々明日の合戦と強て敵めければ、三位同心愛になし。又ここに山田土佐守といふ軍

本号の内容

- 研究 山田土佐入道(佐脇貫)……………一
- 直徳城山を想う(片岡博)……………三
- 記録 龍溪寺身文庫先生(佐脇貫)……………七
- 研究 龍溪寺身文庫先生(佐脇貫)……………七
- 研究 佐伯城絵図解説(小野栄治)……………一三
- 研究 羽出清正屋古文書(上)……………一五
- 日常生活の諸願(泉部)……………一五
- 應徳佐伯守の文正殿指定(井柴弘)……………一八
- 資料 宮ノ浦日記(井柴弘)……………一九
- 研究 朝日城(小野栄治)……………二三
- 探囃 地神経と百万遍(羽柴弘)……………二五
- 探囃 宗元をめぐる(片岡博)……………二五
- 研究 横川先生と佐伯(山本保)……………二五
- 年表集會・史料報告・新年度予算行事計画・集會案内……………二五

取者あり、權守に打せむ一同を誅むれどもその承引もな
く……」(卷十二)

「山田土佐入道匡徳、今惟定の家にあり、彼及一人当
千の才賞ともいふべき者なり。」(卷十二)など記され、
前者は伊東三位義祐の族伊東權守とも、鳥津方に對
し無謀な戦をいともうとする義祐を諫めた話の一節、後
者は鳥津家久が佐伯家中に山口匡徳のあることを知り、
その人物を評した言葉となつてゐる。また西豊記・西治
録などの軍記にも堅田合戦とありあげ、伊東三位義祐の
旧臣山田匡徳(匡得)が佐伯惟定を助けて、日薩勢の侵
入を阻止したことを記してゐる。

このように榊原礼城主佐伯惟定の軍師山田土佐入道匡
徳伯の史蹟はとつてゆるがせにできな存在であるが、
日州萬千徳日原村(現在萬千徳町田原)の備前流の筆録
という『百馬、竟造寺、鳥津、大友合戦異説』には、天
正六年十一月の耳川合戦に山田土佐入道匡徳が、佐伯宗
天(惟教)に属して日向に入り、臼杵郡神門城を守つて
おり、この説をとれば山田匡徳は天正六年ころから佐伯
氏の容分となり、宗天、惟真父子戦死の後、佐伯榊原礼
城に歸つて遺孤惟定に仕えたものと恐われる。しかし天
正十四年十一月四日の堅田合戦、天正十五年一月中旬の
宇目持越における日薩方追撃戦の軍配(指揮)をとつた
後、いつ佐伯氏を去つたものか、否として知るところが
なかつた。もつと天正十五年五月、鳥津家久を降し礼
州を平定した豊臣秀吉は、諸將の論功を行ない、豊後一
國を大友義統に安堵し、日向を伊東・秋月・高橋・鳥津
(家久の子豊久)各氏に分割した。このとき敏能・清武
千七百三十六町を与えられた伊東祐兵(氏部大輔)は三
位入道義祐の二男で、伊東氏没落後、秀吉に仕えていた。
私日さきに佐伯氏を辞去した山田匡徳は、恐らく旧主伊

東祐兵のもとに歸参したものであらうと想像した。この
ほど披見した日向古文書集成に收められた山田文書によ
つてこれが適中してあり、さらに山田匡徳なる人物の経
歴を僅かではあるが知ることができた。

この山田文書によると、山田土佐入道匡徳は諸県郡山
田(北諸県郡山田町)を本領とした山田氏一族で、二郎三
郎宗昌と称したが、伊東三位義祐に仕え、土佐公または
土佐守と改めた。嗣後して土佐守入道(土佐入道)景得
と号し、義祐の嫡孫義賢(父)として都於郡城にあり、天正
五年ごろ本領山田六十町、吉野(南那珂郡吉野方)十二
町を領有した。天正六年正月、三位義祐、六郎義賢と共
に豊後に落ちたが、このころ佐伯惟教の客となつたらうし
い。山田文書のなかには山田宗昌景書というものがある。

天正五年丁丑之年、日向一乱、伊東三位入道景得孫
孫に慶竜殿(義賢)尙代日向没落之、□元野尻之地
頭福永丹波、二希屋(北諸県郡松屋)之地頭米良越後
又内山之地頭野村備中、彼求其外親頼衆一味同心は
逆心を以、嶋津兵庫頭殿(兵庫)に申入候而、野尻、
希屋、内山に豊州衆を繰入候。其故に日向國中惣之乱
念に罷成候。三位入道様も我國を退き山表に御入、權
衆を御頼成候。先落足御打立之、泊々の御宿之次第
大かた書片置候。 後略

かなり長文なので一部だけ引用したが、以下伊東義祐
一行の豊後落ちの道筋を記してゐる。
次に伊東祐兵が山田土佐入道景得におてた書状二通が
ある。一通は文禄三年五月十五日、祐兵が山田宗昌に清
武(官舟郡清武町)村に知行百石を与えたもの、他の一
通は同年五月十八日、朝鮮出陣中の祐兵が宗昌に留守居
を命じ、百石を配当したものである。
山田土佐入道が佐伯氏を辞去したのは、古い古い文禄

二年頃と思われ。それは文録三年五月の、衛兵が宗旨
に与えた二通の知行宛行状でおかる。十有ち前年文録
二年五月に大友義統が改易され、佐伯惟定が領を棄て亡
命しているからである。
(おわり)

随想

城山を想う

東京 片岡 博

当時肺結核といえど、先ず不治ノ疾として恐れられて
いたものである。私ノ母ノその病氣は、長い間に相当進
んで悪化していったようであつた。そして霞見馬の寓居で
殆んど寢たきりになつてしまふと、急に想い出したよう
に佐伯に帰り度いと書いた。急いで来た。出来れば
下度父の仕事の方もうまく都合がつかし、出来れば
何としてでも連れて帰らうということになつた。
皆で散々知恵を絞つたあげく、結局無理をして客車一
輛を借り切つた。当時の二等車は通路が広がつたので、
そのど真中に寢台を据えて、絶対安甯の病人を何とか寢
せたまま連れて帰ることができたのである。あの頃だ
からこそ出来たことであつたに違いない。
寢たままとはいつても当時の汽車の旅、母はまるで小
学生の遠足のようにはしむいでいた。そうしてやつと自
分の生家である山際の土屋家の隣りに落着くことができ

た新日は、ホロホロと涙をこぼしていった。
幾日か経つと、今度外を見度いと書いた。だが
何しろ安甯の身であり起き、することは許されない。仕方な
く寢たままに鏡に映る外の景色を眺められる外はなかつ
た。それでも裏山の竹林は、ずい分育つた叔、などとい
うところをみると、結構何とがして楽しんでたよつであ
つた。
その頃の山際といえど、また道にそつてどこまでも続
く田圃が差つていた。夏の夜などは、聞け放された山麓
の離れにも、やがましいほどの蛙の鳴声かとびこんでき、
た。母は、子供の顔を想い出す、というかと思つと、う
るさくてやり切れないう文句をいつたりした。私はそつ
と家を出て田圃に石を投げたりこんでゐたが、とても手に
負えないものではなかつた。知つてあきらめた。
そうしていつの間にも病氣の分は、ほとんど進んでいつた
ようである。
何しろ主治医は母の長兄であつた。オ、オ、オ、と血
涙でも出れば、即刻報らせるよつと、と哀しく言われてお
り、いつとも細かく氣を配つて貰つていた。
とこみか何があると、昼間は何かお辭儀の電話を借り
ても、用を足せるが、夜分は私が夜番の役目を引き受
けるよりほかはなかつたのである。
深夜にでも、私は起こされると必出た。そして全
く人気のない真夜中の山際の道を通り、三カ丸の前で左
に曲がつて新道にある叔父の病院まで往復していった。
武家屋敷特有の大きな門のわきにあるくぐりを抜けて
外に出ると、私は白塗りの土塀に沿つた道を歩き始める。
その塀が切れると、黒々としたお城山が右手に浮かんで
くる。
満天の星が輝やく夜など、その頂上はまるで手でもと